Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-05-27

中古・中世の説話文学の研究

横田，隆志

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2001-03-31
(Date of Publication)
2008-11-25
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲2383
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1002383

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

【１８９】

氏　名・（本　籍）　横田　隆志（岡山県）

博士の専攻分野の名称　　博　士　（学術）

学　位　記　番　号　　博い第３６２号

学位授与の　要　件　　学位規則第４条第１項該当

学位授与の　日　付　　平成１３年３月３１日

【学位論文題目】

中古・中世の説話文学の研究

審　査　委　員

主査　教授　福長　進

教授　高橋　昌明　　教授　林原　純生

本博士論文は、中古・中世の説話文学史、ひいては当該期の日本文化史に非常に重要な位置を占める二つの説話集、『三宝絵』と『今昔物語集』について、精緻かつ徹底的に作品の本文を読解する文学研究の方法にたつとともに、諸隣接学問分野の研究蓄積を学際的見地から幅広く援用することを通じ、その作品世界と文化史的価値を考究するものである。博士論文執筆にあたっては、第一部第一章「『三宝絵』研究史」を除き、『国文論叢』（神戸大学文学部国語国文学会）『国語と国文学』（東京大学国語国文学会）『説話文学研究』（説話文学会）、ならびに『論集　説話と説話集の研究』（和泉書院、平13）に掲載、あるいは審査の上、掲載が決定している論文を基に成稿した。

第一部は『三宝絵』に関する研究である。『三宝絵』は永観二年（九八四）、冷泉天皇女の尊子内親王のために書かれた。作者は文人貴族として知られる源為憲。本書は上中下三巻からなり、上巻は釈尊の本生譚を、中巻は本朝における仏法の流布を、下巻は一月から十二月までの仏教行事・法会を記す。

本書の背後にはまことに多様な世界が垣間見える。勧学会をはじめとする文人貴族の動向、女性と仏教との関係、大和絵史との交渉、花山朝の始発とともに本作が編まれたという王権との関わり、法会をめぐる寺院社会内の諸状況との関連等、平安期の文化の諸相が本書執筆の重要な背景となっているのである。また、『三宝絵』上巻に収める本生譚は台湾をはじめとする仏教国に広く流布し、東アジア世界における説話の比較研究への道がそこにひらけていることが知られる。同書下巻に記される灌仏や盂蘭盆といった仏教儀礼もまた汎アジア的な広がりをもって展開しており、そこに海彼の文化圏との比較研究の可能性が見出せることも見逃せない。このように『三宝絵』は、幅広い議論の可能性を孕んだ作品なのである。

第一部第一章「『三宝絵』研究史」は、本作に関する研究の歴史とその問題点をまとめたものである。如上の特徴を備えた『三宝絵』にもっとも注目してきたのは、実は国語学の研究者であった。著名な国語学者、山田孝雄氏により本作の研究は事実上始発し、足掛け三十年にわたる氏の研究により、『三宝絵』研究の基礎が固められたのである。ただ、山田氏が本書をあくまで「資料」と位置付けたことは、『三宝絵』研究に一つの偏りを与える結果を招いた。例えば、本書には表記を異にする三種の写本が伝わり、それらを対比すれば、理論上、ある漢字に対する訓が確実に判明する。そのため『三宝絵』は、鎌倉時代の漢字表記を考えるための絶好の国語資料とされたのである。しかし、きわめて当然のことであるが、本書を「資料」として扱うかぎり、作品それ自身の研究は置き去りにされ、作中記事の選択やその論理といった、より作品にそくした問題は捨象されてしまう。『三宝絵』研究の最大の難点はその点に求められるのである。本章では山田孝雄氏の研究の功罪を中心に、『三宝絵』研究史に見られた研究の偏向とその問題点を指摘した。

第二章「『三宝絵』下巻の年代注記」は、作中の記事がいかに周到に取捨選択されているかを、法会の始行年時の注記という側面から論じたものである。『三宝絵』下巻には、複数の出典を参着して法会の始まった年代をできるだけ明示しようとする姿勢が看取され、しかもそれらの年代は、多くの場合、中巻の年代（六～八世紀）と重ねられていた。そして、下巻には、上巻でほとんど登場しない釈尊自身の説話が組み込まれ、その活躍が法会の始源との関わりにおいて描かれていた。上中巻とのこのような有機的連関のもとに、下巻の説話世界は展開しているのである。下巻に数多くの年代を注記すること、特に法会の始まりをかなり意識して書き加えていることは、それらの巻々の一体性を具現化し、その上にたって「今」の法会の世界を展開させるための重要な方法であったと考える。『三宝絵』は独自の論理と方法をもって作品世界を展開させているのである。

第三章「尊子内親王と『三宝絵』」は、作品の基幹をなす一人物、尊子内親王に関する伝記と、その彼女のために為憲が細かく意を用いていることを論じようとしたものである。例えば『三宝絵』序文は「身観バ岸額ニ根離ル草、命論バ江辺不繋船」という詩句と「世中ヲ何譬ム朝マダキコギ行船ノ跡ノ白浪」という沙弥満誓の和歌をもって起筆される。これは、単に無常観に表出しただけの冒頭ではない。一条摂政藤原伊尹を祖父にもつ尊子内親王の周囲には、寿命に恵まれない人が多い。伊尹自身が大臣になってわずか三年で亡くなったことをはじめ、尊子の叔父挙賢・義孝兄弟は二十歳すぎに、尊子の母懐子は三十一歳で亡くなっている。叔父の光昭も、享年はおそらく三十歳前後であろう。多くの死別を経験した尊子の境遇をふまえることなしに、語り手がこの和歌を作品の冒頭に据えた意味の重さをはかることはできないのではないか。為憲は、尊子の置かれた立場の一つの核心をつくようなところから『三宝絵』の作品世界を描きおこしていくのである。

第四章「舎利をめぐる法会と説話―『三宝絵』下巻「比叡舎利会」を読む―」では、当時の法会の実態との連関という観点から下巻第16話「比叡舎利会」を考察する。比叡舎利会を始行した円仁が唐で得たのは「菩薩」ならびに「（辟）支仏」の舎利五粒であり、釈尊のそれは含まれていない。だが、舎利と舎利会とに対する円仁の熱意を礎として、比叡舎利会は多くの僧俗にひらかれた大会となり、『三宝絵』の成立した十世紀後半には、天台座主良源の手で一層の拡充がはかられた。「比叡舎利会」条で興味深いのは、「（円仁は）多ノ仏舎利ヲモテワタレリ」という、出典にはない叙述（圏点部）がなされることである。実は、『三宝絵』の叙述の背後には、円仁将来舎利の「如来舎利」への変貌・実体化という説話の成長があった。そもそも五粒であった舎利が「多ノ舎利」と語られるまでの距離は、本作の書かれた時代にあっては意外に小さかったのである。また、本話は比叡舎利会を中心に据える一方、唐招提寺・花山寺の舎利会を紹介し、「コノ二寺ニマウデヽ舎利ヲオガミタテマツレ」と語り結ぶ。本話に限って他の寺の法会への聴聞をすすめる異例の叙述の背後には、作品成立の数年前に女性と舎利を結縁させるために行われた吉田寺舎利会がさまざまなかたちで影をおとしていた。無論それは、作品の享受者が尊子内親王という女性であったことと密接に結びつく。記事選択のありかたに、『三宝絵』の同時代性と、尊子のための配慮とがうかがえるのである。

第五章「百石讃歎と『三宝絵』」は『三宝絵』と古代音楽史との接点をさぐり、そこから作品世界の一面を照射しようとした論考である。日本最古の仏教歌謡のジャンルに「讃歎」（五七調に整えられる以前の歌体をもつ歌謡）があり、『三宝絵』下巻第18話「灌仏」には、その讃歎の一つである「百石讃歎」が収載されている。しかし、実を言えば、灌仏の次第を詳記する年中行事書や貴族日記を繙いても、釈尊の誕生を祝う四月八日の灌仏会で母の乳房の恩を説くことをうたう百石讃歎が用いられた形跡は見出せない。一見、灌仏と関わらない百石讃歎を作品が語る意味は何なのか。本章では、尊子内親王の母、懐子との関連から、あくまでも『三宝絵』という作品にそくして、問題を把握し直すことに努めた。

第六章「『三宝絵』下巻「盂蘭盆」考」は、民俗学でさかんに考察されている盂蘭盆の行事を取り上げ、その作中記事の選択のありかたを論じたものである。柳田国男は、個々の

人格を喪失した祖霊を拝む行事として盂蘭盆会を位置付ける。しかし、平安時代の資料を見ていくかぎり、柳田の見通しは正当なものではない。天皇が供物を送る御願寺の変遷という王権のレヴェルから、文学作品に見られる盂蘭盆行事の描写に至るまで、盂蘭盆の行事は、亡くなってまもない故人を具体的に念頭において行われているのである。『三宝絵』もまたしかりであって、『仏説盂蘭盆経』の目連悲母説話を丁寧に訳出する背景には、やはり尊子内親王の母、懐子の影がある。

以上のように、本博士論文第一部「『三宝絵』の研究」は、『三宝絵』を「資料」とする山田孝雄氏以来の研究姿勢を徹底的に斥け、国語学史や仏教史を論じるための単なる材料という位置付けには還元できない、より多様な議論の可能性を孕んだ書としての作品像の提起を目指したものである。

第二部は『今昔物語集』に関する研究である。『今昔』研究は近時、停滞している。理由はさまざま考えられようが、その最大の一因は、『今昔』の文学的達成を代表するとされる巻二十六以降の巻々の研究が立ち遅れていることにある。そこで本博士論文では、巻二十九「悪行」篇や、巻三十「雑事」等に主として収められる情愛や性に関する説話を取り上げ、語り手の視線のありかたやそこに導かれた作品世界の相貌を論じた。

第一章「「悪行」篇の世界―『今昔物語集』巻二十九のために―」では、仏法と〈公〉中心主義という『今昔』の編纂に枠組みを与えた二つの認識体系が「悪行」篇においてどのような位相をもって表出されているか、という分析視角から、必ずしもその価値観をもって測れない作品世界の相貌を炙り出した論考である。『今昔』の語り手は、大変、不器用で硬直した想像力で説話世界に対することがある。しかし、この巻にあって、語り手は、自らの価値観や想像力をもって説話世界を押しつぶそうとはしない。違和感を抱きつつ、しかしそこに蠢く群像をしかと見つめようとするその視線が、傑出した作品世界の描出に分かちがたく関わっているのである。

第二章「『今昔物語集』における情愛・性」では、『今昔』の語り手が、男女の情愛にたちいった理解を示すことに積極的ではなく、性的な素材に対して過大な関心を寄せていたわけでもないことの指摘を通じ、そこに展開された作品世界の可能性について論じた。そして、「閨」「閑」その他、猥雑な語彙を採りこみ、題材的にエキセントリックな話は少なくない一方で、そうした説話が、性的素材に焦点化しない視線と不思議な同居を見せていることを指摘した。ある素材を語ることと、それらの素材に語り手がどういった関心を寄せるかということとは別問題なのである。

説話は人の営みのあるところには必ず存在し、説話集の内包する多様性とはすなわち人間の営みの多様性である。『三宝絵』にせよ『今昔物語集』にせよ、それらの作品がもつ議論の可能性は尽きるところがない。語り手や、作品をとりまく場をよりよく理解し、作品の立体的な読みを深めていくことは、とりもなおさず、古代中世の日本文化の豊かさを発掘していくことである。個々の説話にそくした具体的実証的な読みを積み重ね、今後も、中古・中世の説話文学の研究に貢献していきたいと考えている。

（四百字詰原稿用紙で約四百七十枚）

［課程博士用］

（別紙１）

論文審査の結果の要旨

氏　名	横田隆志
論文題目	中古・中世の説話文学の研究

要　旨

本論文は、第一部「『三宝絵』の研究」、第二部「『今昔物語集』の研究」から成る。以下、各章の論旨を要約する。

第一部第一章は、『三宝絵』の研究史の整理である。今日までの二百を超える論文を網羅し、それを手際よく整理分類し、深化発展すべき諸課題に言及している。

第一部第二章は、『三宝絵』は上・中・下巻から成り、それぞれ「昔」の釈迦の本生譚、「中来」の本朝における仏法の流布、「今」の仏教行事を記すが、下巻の説話世界が有機的連関のもと上・中巻に根拠づけられて展開することを、下巻において法会の始原を明示するために年代注記が殊更に付されている現象等に注目して明らかにしている。

第一部第三章は、尊子内親王の結縁のために書かれたというその著述目的を踏まえて『三宝絵』を統一的に読もうとするとき欠かすことのできない基礎作業、すなわち尊子内親王の伝記研究である。

第一部第四章は、下巻にみえる「比叡舎利会」の起源を語る説話を扱う。まず、比叡の舎利会の始行と展開を諸資料を駆使して明らかにし、なかんずく、この舎利会が良源によって女人禁制の叡山から吉田寺に下ろされて挙行された事実に注目して、比叡の舎利会が女性にまで公開されていたことが、作者、源為憲をして尊子内親王の結縁のためにこの説話の導入を思い立たせたことを論証している。『三宝絵』は当時の法会の実態をそのままに書きとどめているのではなく、尊子内親王を念頭に置いた取捨選択が明らかに働いていることを該話は示していると結論づける。行論は安定感があり、説得的である。国文学界において権威ある雑誌として認められている『国語と国文学』誌に掲載されて、高い評価を得ている。

第一部第五章は、下巻の「灌仏」を扱う。この説話の掉尾にみえる、母親の乳を百八十石も飲んで成長したことに対する報恩の曲、「百石讃歎」に注目する。『三宝絵』は灌仏会において「百石讃歎」が誦されたとするが、諸資料から「百石讃歎」は修正会、仏名会、亡母追善の法会等で用いられたことは確かめうるけれども、灌仏会で用いられたとする資料は『三宝絵』の他には見出しがたいことを明らかにする。そして、『三宝絵』が報恩を重視する話柄を好んで導入していることと併せて、『三宝絵』が灌仏会とのつながりの希薄な「百石讃歎」を該話に据えているのは、すでに母を亡くしている尊子内親王の境遇を踏まえて、尊子内親王に母への報恩を説き、供養を勧めようとする作者、為憲の意図によるものであると述べる。従前はっきりした理由説明を与えることができなかった当該問題に対して、尊子内親王との関わりから見事に論じた好論である。

主査記載氏名・印	福長　進

第一部第六章は、下巻に位置する「盂蘭盆」を扱う。平安時代の盂蘭盆会の実態を明らかにして、当時の盂蘭盆会は、個々の人格を消失した祖霊を拝むという、柳田国男が「祖先の話」の中で述べているような行事ではなく、あくまでも特定の個人を念頭において行われたとする。そして、四恩説を説く『心地観経』の要文を敢えて長々と引き、子が親のために功徳を積むことを勧める該話は、明らかに尊子内親王に亡母のための供養を促す目的で形作られていると結論づける。第五章を補完する内容となっている。

第二部第一章は、『今昔物語集』巻二十九「悪行」を対象として、そこに収載される諸説話が、「集」の枠組みに顕化する二つの価値観、すなわち仏法と〈公〉中心主義に収束するわけでもなく、さりとてそれから浮き上がってしまうわけでもない、実に微妙な位相にあることを論じ、それがかえって『今昔物語集』の世界に奥行きを与えていると述べる。『今昔物語集』の表現行為を編纂行為と説話行為に分けて分析し、両者の葛藤を読み取ろうとしている。

第二部第二章は、『今昔物語集』は性的素材を少なからず取り込み、猥雑な性にまつわる語彙を用いてもいるけれども、その世界はどこか明るく、むしろ一種の清潔感すら漂わせていることを指摘する。語り手と素材との心的距離を表現に即して計測しようとする地道な作業である。

第一部は、これまで所収説話の出典研究、諸本研究、国語学的研究にほとんど費消されてきた『三宝絵』研究を、作品の全体を見据えた作品論に高めるべく、『三宝絵』の総序に明示されている著述目的――冷泉天皇皇女、尊子内親王の道心を励まし、その静かなる心を慰めるために著された――を踏まえて、そこから説話の配列や各説話の内容構成・意味づけを可能な限り明らかにしようとする。『三宝絵』の諸説話を尊子内親王との関わりで徹底して読み、尊子内親王を介することによってはじめて理解できる『三宝絵』の世界の諸相を明らかにした点が評価される一方、かかる読みの徹底化によって、『三宝絵』の世界観や歴史観が閑却され、各説話がそれらを実現するためにどのように奉仕しているのかといった論点も欠けてしまい、かえって自身の読みの方法の限界を露にしている。しかしながら、『三宝絵』研究を格段に前進させた功績は疑いの余地のないところで、今後、読みの方法を修正しながらしなやかに作品を対象化することを期待したい。第二部は、『今昔物語集』の編者の世界観や歴史観は「集」の形成すなわち説話の配列・構成に立ち現れているが、各説話の語りの中には、それに収斂しない出来事に対する多様な眼差しが交錯していて、それが『今昔物語集』の世界を豊饒なものに成しあげるのに与っていることを、表現に密着しながら明らかにしている。『今昔物語集』の研究は緒についたばかりで、したがって現段階での評価は差し控える他はないが、今後の進展を予感させる数々の可能性に満ちている。

以上の結果に鑑み、本審査委員会は論文提出者、横田隆志が博士(学術)の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

審査委員

区　分	職　名	氏　名
主　査	教授	福長　進
副　査	教授	高橋昌明
副　査	教授	林原純生